プリンセスと呼ばないでっ

ブレイバード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリンセスと呼ばないでっ

【Ｎコード】
Ｎ４４８４Ｅ

【作者名】
ブレイバード

【あらすじ】
この物語は、魔族のお姫様が織り成す、とんでもねーバトルファンタジー&ラブコメチックなお話である。

1．運命という名の私の野望！

この十五年、私はこの日のために生きてきたのだと自信を持って言える。うん。根拠は特にないけど、勝手に今日を運命の日と決め付けてるのである。なんか文句でもある？

「なにを考えておられるのですか、姫様！　正気ですか！　あなた今自分がなにをしておられるのかお分かりかっ！（副音声・いい加減にしろ、この小娘が！　マジでこれ洒落になんねえんだよ！　てめえのお転婆の皺寄せは全部こっちに来んだよ、このクソったれ！）」

「そうです姫様！　今でもまだ遅くありません！　すぐに馬鹿な考えはお捨てになって、お戻りをっ！（副音声・今すぐ考え直せ、バカ！　つーか、なーにが運命だ、バーカ！　バーカ！）」

とりあえず、後ろでがなりたててるおっさん二人が鬱陶しいので、私は急ぎ足で進めていた歩を止めた。と同時に、右手の中指と親指で、パチン、と音を鳴らしてやる。すると、おっさん二人はなにが嬉しいのか、無様な悲鳴を上げながら、各々地面をのた打ち回り始めた。自分でやっといてなんだけど、見るに耐えないね、こりゃ。

ところで、さっきから、おっさん、おっさん、言ってるけど、二人はただのおっさんではない。期待されても困るのでさっさと端的に言うと「人間ではない」のである。

その正体は「鬼」なのだ。文字通りに。

頭に鋭く長い二本の角を持った、骸骨面。全身、顔色まで青と赤にそれぞれ統一された双子の鬼兄弟は、私のお目付け役なのだ。勘弁してほしい。十五年の付き合いだから、今更気色悪いもないけど、ここで言っとかなきゃ、私の感性疑われそう。なので、あえて言う。

このおっさんたちは、気色悪い。

そして、重ねて、あえて言っとこう。

こいつらのことなんて、どうでもいい。

再び私が指を鳴らすと、二人はのた打ち回るのを止めた。このお目付け役二人は、私が指を鳴らすとこうなるのだ。本人たち曰く「神経をすり潰されるような痛みが全身を襲う」だとか。どうでもいいけど。

さて、痙攣したまま動けないご様子の二人（鬼？）をその場に捨て置いて、私は再び歩き出す。と、背後でしつこくまぁだ声が響いた。

「お、お待ちください、姫ぇ……！（副音声・クソったれ、戻って来いこのバカ！）」

「我々は姫様のためを思えばこそ……！（副音声・運命なんて夢見てねえで、目ぇ覚ませバーカ！　バーカ！）」

振り返ることなく、指を鳴らしてやる。私の地獄耳は、副音声まで聞き取れる優れものなのである。

「いいでしょ、別に。花の乙女に恋と夢は切り離せないのよ」

捨て台詞を決めて、私はその場を後にする。

おっと、指鳴らすの忘れてた（決して、わざとではない）。

動かなくなった二鬼は、まあ、運がよければそのうち誰かが保護するだろう。

さて、邪魔者がいなくなったところで、自己紹介でも一つ。

私の名は、キャロット＝ルシフェル。十五歳にして、絶世の美少女と誉れ高い世界有数のお姫様である。しかし――これだけはあまり声を大にして言いたくないが、私はそんじょそこらのお姫様とはワケが違う。なにが違うのかって……――ああもう！　そこまで私に言わせるつもり！？

腹いせに指を鳴らしてやろうにも、肝心の鬼共はこの場にいない。

全く、役に立たない鬼共である。
はあ……。とりあえず、話を戻そ。
とにかく、私はそんじょそこらのお姫様とはワケが違うのである。そこ、鬼がお目付け役の時点で普通じゃない、なんてツッコミはしないよーに。まあ、そのツッコミは妥当ではある。
なぜなら……私は「魔族のお姫様」なのだ。
……はいはい、そこ。白い目で私を見ないよーに。
私だって、好き好んで魔族のお姫様なんてやってるわけではない。運が悪いことに、たまたま父親が魔族で、更に輪をかけて運が悪いことに、そいつが魔族の王様だったってだけの話である。ほんとーに、ついてない。こんなかわゆい女の子を捕まえて、魔族のお姫様だなんて……！
まさに、悲劇のヒロインとは私のために用意された言葉だ。
し、か、し！　しかしだ。なにを隠そう、私は「純血」の魔族じゃないのである。
はい。ここ、重要ね。私は「純血」の魔族じゃあない。
実は、魔族と人間の血を引いた混血児、つまり、魔族と人間のハーフであったりするのだ。
ゆえに、私は魔族のお姫様でありながら、容姿はどこからどう見ても、人間なのだ。それはもう、誰も文句のつけようのない美少女だ。
背中まで流れるブロンドの髪。ルビーを思わせる紅の瞳。多少まあ、童顔ではあるけれど、成長によりカバーできる範囲内ではある。プロポーションは……まあ、同じ年頃の女の子に比べても小振りというかなんというか……――只今発展途上中なのである！
と、呑気に自己紹介などに時間を割いている場合ではなかったことを思い出し、私は気を取り直して、薄暗い地下通路を早足でひた歩く。
なにせ、今日は運命の日なのである。そう、誰がなんと言おうと運命の日なのである。しつこいようだが、う、ん、め、い、の、日、なのである。

はい、そこ。くどいとか思わないよーに。これは、乙女にとっての一大事。私の一生を左右するエックスデーなんだから。
しかしまあ、この時のためにドレスアップして、張り切ってウエディングドレスなど着込んできたはいいけど、この衣装は明らかに場に合ってない。日の目を見ないかび臭い地下通路を、なにが悲しくて花も恥らう十五の乙女が、純白の嫁入り衣装完全武装で突撃しなければならないのか……それは話せばひじょーに長いのである。

物心がついた頃から、私の周りは魔族で溢れ返っていた。
魔族……具体的には「人間以上の知能を持つ人間以外の生物」これが魔族の定義である。なんだか、ハブられた集団っぽい括りつけではあるけど、実際、魔族なんてゲテモノ料理の具材に使われても不思議じゃない「キモイ」連中の集まりである。ちなみに、今、私の使った「キモイ」という表現は「道端でばったり出くわしたなら、間違いなく悲鳴を上げて逃げ出す」ぐらいのつもりで捉えるよーに。
しかし、幼い頃から魔族の中で育った私は、当然、それが普通であると認識していた。
「それ」とは、例えば、鬼が世話役、遊び相手がしゃべるガイコツ、家庭教師は、嫌味なドラゴン、とかそういうことである。
……断っておくが、私は至って正・常、である。おかしいのは、あくまで周りの環境であって、私ではない。その辺を履き違えないよーに。
しかし、そんな環境を当たり前に感じていたのは、否定しようもない事実である。その頃の私は、疑うということを知らない純な子供だったのだ（今も純な乙女ではあるけど）。しかし、そんな私も、思春期を迎えるとともに「おや」と思い始めた。

おかしいぞと。周りがなんか、おかしいぞと。
おかしいのは、あくまで私ではなく、ま、わ、り、だったのである。
ただでさえ、思春期真っ只中（と言っても、今も思春期だけど）の難しい年頃である。周りをガイコツやら鬼やらドラゴンやら狼男やら蛇女やら以下同類項やらに囲まれて平気でいられるわけがない。が、どこを探しても私と同じ姿形をした生き物……つまり、人間はいなかった。
その頃から、家出を試みるようになったが、ことごとく、失敗に終わった。魔族と人間
は敵対関係にあるだとか、魔族の姫である私が人間に興味を持つなどもってのほかだとか、
説教と小言の毎日である。
私の中に流れる人間の血を意識しだした途端、私自身の立場が私を縛り付けるなんて――ああ、なんという不幸なの……と、夜な夜な人知れず袖を濡らしたものだ。
……いや、決して説教を垂れる連中を片っ端からぶっ飛ばしたり、腹いせに指を鳴らして鬼共をのた打ち回らせたりなんて、してはいない。断じて、そんな事実はない。ないったら、ないのである。
とにかく、私の人間に対する興味は日に日に膨れ上がっていった。そもそも、私の日常は二十四時間城の中である。深窓の佳人といえば聞こえはいいが、住まう城は魔族の寄生した、巨大お化け屋敷だ。私でなくとも、誰だってそんな環境願い下げに決まってる。
しかし、ある日何気なく足を運んだ書物庫で、私は運命の一冊と出会った。こう見えても、私は熱心な読書家なのだ。決して、禁術の記された古代書や、悪魔との契約書に手をつけようと、こっそり立ち入り禁止の書物庫へ侵入……なんてことはないのである。
その時、埃を被った書物庫で私の目に留まったものは、めぼしい資料（物騒なものでは決してない）ではなく、なにやら子供向けの絵本だった。

……はい、そこ。呆れた目で私を見ないよーに。

とにかく、悪魔の歴史書や呪術大全に挟まれた絵本に私の心は奪われた。いや、悪魔や呪術に心を奪われたわけじゃーない。それは、人間の子供向けに描かれた、ごく普通の絵本だったのである。

物語の内容は、魔王に捕らわれたお姫様を勇者が助け出して、めでたしめでたし、というものだ。立場上、魔王の方を応援しなければならないのだろうけど、もちろん、私は「捕らわれたお姫様」に感情移入することとなり、読み終わった頃には、乙女心に火がついていた。

理想が私の中で生まれた瞬間である。

城を抜け出すにしても、自ら抜け出すよりも、勇者が「私を助け出すために」ここへ来るのを待ってから、一緒に抜け出す方がロマンチックに決まっている。勇者に連れ出されたとなれば、誰も文句は言えないだろうことも、折込済みだ。

とにかく「運命」という名の私の野望は、その時から動き出したのだ。

1．運命という名の私の野望！（後書き）

お読みいただきありがとうございました。更新は不定期になりますが、長い目で見守ってやってください。
感想等頂けたら、泣いて喜びます。

2．勇者狩り！

私は疾走していた。

ドレスを着込んでいるので、裾を捲し上げないと走ることもままならない。おまけに、パンプスを履いているので、足が痛くて仕方ない。地下通路の地面は岩盤なので当然ではあるけど……。

「お待ちください、姫様！」

さっきから、私は追われているのである。

……魔族共に。

「うっるさい！　追ってくるなあぁ！」

必死の私の叫びも虚しく、後方から魔族達は束となって押し寄せてくる。

うう……せっかくの、せっかくの私の運命の門出が……これでは台無しだ。

どうやら、お目付け役の鬼共が仲間を呼びつけたみたい。こんなことなら、あの時、止め刺しとけばよかった……って、今のは、もちろん冗談である。

はい、笑うとこ、笑うとこ。って、笑ってる場合じゃないの！

とにかく、私はひた走る。

もしここが城の中でなければ、今頃、あんな追っ手なんて私の魔術でケチョンケチョンにしてやれるのに！　歯がゆいことに、この城には強力な封魔の結界が張られているのだ。封魔の結界とは、読んで字のごとく魔術を封じる結界のことだ。この中に居る限り、どんな強力な賢者もただの凡人に成り下がる。何度も私が家出を失敗している原因がそれだ。

もちろん、追ってくる魔族たちにもそれは適用される。魔性を封じられた魔族なんて、それこそ、ただのキモイ連中の集まりでしかないでしょーに。しかし、体格で勝負されるとお話にもならないので、ここは逃げの一手を打つしかないのだ。

しかし、ただ闇雲に逃げるわけじゃーない。
封魔の結界のおかげで、強力な魔術は使えない。がしかし、微々たる魔術であるなら話は別だ。
探索（ディテクション）。この魔術は、闇魔術の中でも初歩中の初歩であり、魔力を持つ者なら子供から大人まで誰でも扱うことが出来る魔術だ。おまけに呪文要らずの手間要らずである。
ただし、探索したい目標のイメージが頭の中にあるのとないのとでは、必然的に難易度が変わってくる。要は、自分が知っている「モノ」なら感知しやすく、知らない「モノ」なら感知しずらい、ということである。
言っておくと、並みの魔術師なら、探索（ディテクション）一つまともに使えないのが、封魔の結界効力だ。し、か、し、私は並じゃーないのである。自分で言うのも嬉しいが、天才なのである。美少女天才魔術師なのである。
……はいはい。魔王の血引いてるからだろ、なんてツッコミはしないよーに。意外にそれ、コンプレックスだったりするんだからね……。
――と、に、か、くっ。
探索（ディテクション）を駆使して、私はその対象を捉えているのである。もちろん、その対象とは……。
「姫様！　姫様！　姫様ぁがー！！」
「ああっもう！　うっとうしいから、ついてくるなあぁー！」
「勇者だ！　姫様が勇者に鉢合う前にぶっ殺すんだ！」
……なんですと？
「散れ！　姫様より先に勇者を見つけ出して、血祭りにぶは！」
束の先頭で物騒なことを指示している馬鹿（狼男）に私は、パンプスの片方を投げつけた。続けて放った第二射も的確に馬鹿の顔面に命中する。
「ちょ……お前らぁあああー！」
顔面にパンプスを受けて仰け反った狼男は、あえなく後ろから押

し寄せてくる魔族の束に潰された。当然の報いである。
しかし、なんと魔族共は地下通路を散り散りになり始めた。あの馬鹿の言葉を実行しているのだ。
「あー！　ちょっと、待ちなさいよっ！」
私をその場に残して、魔族共は「勇者狩り」に向かってしまった。
って――。
「ふざけんなあぁぁ！」
素足のまま、私はまた走り出す。
一日千秋の思いで私がこの日をどれだけ待ちわびていたことか……あの絵本と出会ってからというもの、魔族たちに無理を言って人間の世界の書物を集めさせ、勉強の日々。人間の言語、風習、価値観等をマスターするのに、私がどれだけ苦労したことか……この日を思えばこそ、今までお化け屋敷にだって我慢して引き込んでやっていたというのに……それを……それを……！
乙女の純情踏みにじる気っ！
怒りに震えながらも、一方で私は冷静だった。いくら数が多くても、魔族共は「勇者様」の位置を知りはしないのだ。この地下迷宮を当てもなく走り回ったところで、結果は見えているのである。
問題は、私が勇者様と共にどうやって無事にこの城から抜け出すか、だ。いくら勇者と言えど封魔の結界の中では、あの魔族の数を相手にはしきれないだろう。なんて思いながらも、その予想を裏切られるのを望んでしまうのは、可愛い乙女心というものである。
頭の中に浮かんでいる勇者様の位置は常に移動している。一体、勇者様はどこに向かっているのだろうか。
とにかく、もうすぐ勇者様に追いつける。その時こそ、私は籠（かご）の中から抜け出せるのだ。
突き当たりの通路を右へ曲がりながら、私の胸はドキドキと高鳴り続ける。行き止まりにぶつかったのか、勇者様の位置が止まった。勇者様までは、もう目と鼻の先である。
「この先を左に曲がれば……」

もう必要もないので、私は探索（ディテクション）を解いた。正確には緊張のあまり、集中力が途切れて、術が切れてしまったのだ。やはり、封魔の結界にケンカを売るもんじゃーない。集中力が途切れた途端、軽い眩暈を覚えて、私はよろめきながらその場に立ち止まった。

思い出したように体に押し寄せてきた疲労は、かなりのものだった。まあ、ドレスを着込んで鬼ごっこをさせられれば当然の結果ではある。素足でかまわず岩盤の上を駆け抜けたので、足も鈍い痛みを訴えていた。

しかし、それだけの思いをしても惜しくない「モノ」が、この先に待っているのだ。

私は気を取り直して通路を進み、突き当りを左へ曲がる。

いよいよ、いよいよ、運命のご対面である。

「勇者様っ！」

行き止まりの壁と向かい合った背中に、私の興奮は絶頂に達した。

3．絶対認めないっ！

「わきゃあ！」
私の声に、勇者様は素っ頓狂な声を出して、その場で飛び跳ねながら体全体でビックリを表現した。
――ん？　わきゃあ？
勇者様の第一声にいささかの違和感を覚えながらも、私は勇者様の元に駆け寄る。未だ背を向けたままの勇者様が、何か震えているようなのは気のせいだろう。などと、気付かない振りをする私に構うことなく、勇者様は、見るからに恐る恐るこちらを振り返って。
「きゃあああああああ！」
私と目が合った途端、悲鳴を上げた。
「だ、誰ですかあなたっ！　な、なんでウエディングドレスっ！　なんで人間がここにっ！」
なにやら、随分混乱している上に怯えているご様子である。
「に、人間！　あなた本当に人間なの！　ま、魔族じゃないの！？」
「え……と」
それは非常に微妙な質問である。人間だといえばそうだし、魔族でないとも言い切れない――って。
そんなことはどうでもいいの！
「そんなことより、あんたこそ何者よっ！」
私はフンと鼻を鳴らして、ズイッとそいつに顔を寄せて、睨みを利かせた。
勇者だとばかり思っていたのに、今、私の目の前にいるのは、気の弱そうな女の子だ。歳はぱっと見私と大して変わらないだろう。肩の辺りまで伸びた黒髪に、おろおろとせわしなく泳ぐつぶらな瞳。脆弱な見た目とは裏腹に、身に着けている甲冑は光沢を帯びて、煌いている。おまけに腰にはご立派な刀剣までぶら下げているくせに、とても剣士とか兵士とかいう柄じゃーない。

「え、あ……す、すいませ……ごめんなさい。な、何語ですかそれ――？」
噛み付くように迫る私に、そいつは、壁際まで後ずさりしながら、声を出す。そういえば、人間に魔族の言葉を使っても通じるわけがなかった。いつも魔族しか相手にしないものだから、自然に魔族の言葉を使ってしまったのだ。
私は、気を取り直してそいつから顔を離すと、コホン、と咳払いを一つ。
「そんなことより、あんた何者よっ！」
「ひええ！」
もう一度、今度は人間の言葉で、噛み付かんばかりに睨みを利かせてやった。
「わ、私は、ア、アズサ＝アスファエルと申しまして――」
「名前じゃなくて、な・に・も・の・か・って聞いてるのぉ！」
「ひええ！　すいません、すいません！　わ、私……い、一応――勇者なんですぅ！」
――一瞬静寂のち。
「なあんだ。あんた勇者だったの」
「え？　あ、は、はいっ」
にこやかに笑ってみせる私を見て、そいつは、安心したように笑顔を見せた。――が、その笑顔も、すぐに引っ込むこととなった。
「ほんっと、面白い冗談だわあ……さては、あんた、私を笑い死にさせようって気ね？　そうでしょ？」
にっこりと笑ったまま、私は胸の前で拳をバキボキと鳴らして見せた。ただならぬ殺気を感じたのだろう。そいつは、壁に張り付きながら「ち、違います！　私ほんとに勇者なんですよぉ！」と哀願するように私を見つめた。
「あっはっは。面白い、面白い」
笑いながら、私は更に拳を鳴らす。
「目、目が全然笑ってないですよぉ！」

「じゃあ、真面目に私の質問に答えてくれる？　命が惜しければねぇ」
「ほ、本当なんですってばぁ……し、信じてくださいよぉ……」
がたがたと震えながらも、あくまで自分を勇者だと言い張る。相当な強情張りなのか、それとも、もしかして本当に――って。
頭の中に浮かんだ不吉な考えを、私は首をぶんぶんと横に振ってかき消した。どこをどう見れば、これが勇者だというのだ。そもそも、勇者は男のはずである。それはもう、白馬に乗った王子様のように、爽やかな美少年に決まっているのだ。じゃなきゃ絶対認めないっ！
と、握りこぶしでわなわなと肩を震わせていると、地下通路のどこかから魔族共の声が反響してきた。
「……ちょっと、あんた」
「は、はい？」
「あんたが勇者かどうかはひとまず置いといて――」
「えー……。置いとくんですか？」
「お、い、と、い、て！」
不満気に声を出すのを、睨みを利かせて黙らせる。どうも、この勇者様は危機感というものが足りないらしい。
「とにかく、ここを無事に抜け出すのに、あんたにも協力してもらうわよ。異存ないわね？」
「は、はあ……でも、私――」
「い、ぞ、ん、な、い、わ、ね！」
「は、はい……」

4．単刀直入！

「あ、あの……本当にやるんですか？」
「文句言わないの。それとも、あんた、魔族の群れと戦ってみたいわけ？　だったら、この城の連中ざっと、二、三百体は化け物を楽しめるけど？」
「や、やります……」
　私の脅しに、勇者様……もとい、アズサは従順の意を示した。随分扱いやすい性格をしている。やはり、これが勇者だなんて天地がひっくり返ったってあり得ない。勇者の称号は、爽やか、美少年、純情、の三拍子セットの上に成り立つものなのだ。読み漁った人間の本から取った正確な統計に、純な美少女の夢を上乗せした、正当な見解である。
　言っとくけど、ツッコミは一切受け付けない。というか、今はそんな場合ではないのだ。
　程なくして、物騒な言葉を撒き散らしながら、魔族三体が私たちの元に辿り着いた。
　獣男（アニマン）に、死霊騎士（ゴーストナイト）、顔無し男（フェイスレス）だ。
「ひ、ひえええ！」
　三体の魔族を目の当たりにして、アズサが悲鳴を上げる。
　ああ、もう、うっさい。私の耳元で大声出すな。というのも、今アズサは私を盾にするように、後ろから私に抱きついているのである。私の喉元にはアズサの握る剣の刃が突きつけられている。いわゆる人質という体だ。
　魔族共に見えないように、アズサのお腹に肘打ちを入れる。甲冑の上からなのでダメージなどないだろうけど、アズサははっとして私に目を向けた。
「ちゃんと演技しろ！」
　ジト目でそう訴えてやると、アズサはコクコクと肯き、魔族共に

目を戻した。
……って、待て。ここで素直に言うこと聞かれちゃ、魔族達より私の方が怖い、みたいじゃない？
――まあ、この際目をつぶっておこう。
「あ、あ、あのぅ……この人の命が惜しければ、そ、そこを通してください……！」
演技のえの字も伺えない台詞である。案の定、魔族達は各々大声で殺すだのなんだのわめき散らす。魔族の言葉が分からなくとも、アズサは怯えきり、人質を取りながら震えている。
仕方なく、私は魔族の言葉で獣男達（アニマン）に、アズサの台詞を訳してやった。
「ちょっと、あんたたち。この女、黙ってここを通さなきゃ私のこと殺すって言ってるわよ」
私の言葉に、獣男達（アニマン）は驚きのリアクションを見せる。
「ひ、姫様を殺すぅ！　な、なんて命知らずな人間だ！」
「いやあ、姫様を人質にしてる時点でもうある意味勇者だぜ！」
「人質？　あれ、姫様ふざけてるだけだろ？」
……人聞きの悪いことを言う。それじゃー、私がまるで恐ろしい人物みたいじゃないの。
「ちょっと！　グダグダ言ってないで、さっさと道開けなさいよ！　ぶっ殺されたいの！？」
私はそう言って獣男達（アニマン）を睨みつける。
「――って、この女が言ってるわよ」
決して、私情からの言葉ではない。あくまで、アズサの言葉を脚色して訳しただけである。
いや、その女何（アズサのことだ）も言ってねーじゃん。なんて顔（もっとも、フェイスレスは顔ないけど）をしつつも、獣男達（アニマン）は黙って通路を開けた。
「ほら、行くわよ」
ポケーと私達のやり取りを見ているだけのアズサに、私は言った。
気を取り直して、アズサが私を連れ、獣男達（アニマン）の前を慎重に横切る。

化け物に怯えて、全く相手を直視しないアズサに、襲いかかろうとする素振りを見せる魔族三体は、私がガンつけるとその場で動かなくなった。

……はい、そこ。わざわざ人質になる意味ないじゃん。なんて、ツッコミはしないよーに。中には私の睨みなんて通じない厄介なのもいるんだから。

「あの……さっきの人達、あなたのこと見て怯えてたみたいでしたけど、あなた何者なんですか？」

魔族をやり過ごして地下通路を進みながら、アズサがそんなことを言った。

「ちょっと。私を見て怯えたって、人聞きの悪いこと言わないでよね」

当然、私は不機嫌声を返す。しかし、アズサが疑問に思うのも無理はないだろう。私が魔族の言葉を扱えることにも疑問を持ってるみたいだし。まあ、それを言えば、ウエディングドレス着てるのもなんで？　って顔してるけど。

はあ、と私は一つ息を吐く。

とりあえず、この後の予定を考慮すると、アズサとはちょっと長い付き合いになりそうなので、私は事情を説明することに決めた。

「じゃあ、単刀直入に言うわね」

ちなみに、獣男達（アニマン）をやり過ごしてから、私達は肩を並べて歩いていたけど。

「私、魔族の姫なのよ」

アズサはピタリと足を止めた。まあ、予想はしていたので、アズサがリアクションに移る前に、私はまくし立てる。

「正確には、魔族の王様と人間の混血（ハーフ）児なの。それで、生まれた時からこのお化け屋敷で大事に大事に育てられたってわけ。でも、ある日人間に興味が沸いてね。人間の本の話じゃ、人間と魔族は常に対立の歴史を刻んできたって言うじゃない？　なんか、魔王は行方をくらましたけど、その娘はまだ生きているとか、勇者がその討伐

に向かったとか最近の本に書いてあってさ。そんで、待ってたのよ。勇者が迎えに来てくれるのをさ」
だから、私は毎日、探索（ディテクション）を使って、城内に侵入者が居ないかをチェックするのが日課になった。こんなお化け屋敷を訪ねる物好きなんて、勇者以外にあり得ないからだ。そんな折、とうとう、今日地下通路に覚えのない反応を感知した、というわけである。
私の説明にアズサは私から後ずさる程、引いていたけど（失礼な）、しばらくすると、落ち着きを取り戻した。気が弱いくせに、順応力は意外にあるようだ。
「でも、魔族だなんて、ちょっと信じられないですね。見た目は完全に人間だし。あ、もしかして、今は人間に化けてるだけで、正体はおどろおどろしかったりするんですか？」
おどろおどろしいってね……。
「馬鹿言わないでよ。そんなわけないでしょ」
「でも、魔王の血を引いてるんですよね。あ、魔王ってどんな魔族なんですか？　私噂には聞いたことあるけど、実物なんて見たことなくて。十五年前に突然姿を消したって話ですけど」
「分かんない」
私の一言に、アズサは目を丸くした。
「だって、私も実物の顔拝んだことないもん。ていうか、私の両親どっちも行方知れずだしね。まあ、父親の方は昔勇者に封印されたって話だけど、それも怪しいもんだわ。正確な封印場所も、その器だって定かじゃないし」
「ずいぶん、サバサバしてますね。お父さんが勇者に封印されたのに。憎くないんですか？」
アズサの言葉に、私は横目でアズサを見てから、肩をすくめた。
「別に。奪われて憎くなるほど愛された記憶もないしねー」
私の言葉に、アズサは黙り込んでしまった。
気まずい沈黙が流れる。
ダメダメ。こーいう重い空気は苦手なのに、もう！

「そ・れ・よ・り！」
気を取り直して、私はアズサに詰め寄った。
「は、はい？」
「あんたこそ、なんでこんなとこに居たわけ？　っていうか、どうやって地下まで侵入してきたのよ。勇者なんて嘘つく理由は何？」
質問をまくし立てる私に、アズサは目を泳がせる。
……って、これじゃ私がいじめてるみたいじゃん。
「……とにかくっ」
今にも泣き出しそうなアズサから離れて、私は言った。
「あんたも、ここから連れ出してあげるわよ。ここで私に会えたことに感謝するよーに」
「あ、ありがとうございます……え、と――」
「名前？　そういえば、まだ教えてなかったっけ。私は、キャロット。キャロット＝ルシフェルよ。よろしくね」
「は、はあ……。よろしく」
差し出した私の手を、アズサはおずおずと握った。
不敵に笑う私の微笑みの真意に、気付いた様子はない。

5．竜神召喚（ドラグヴェント）！

私達は追われていた。
魔族の大群である。
いくら、探索（ディテクション）を使っても、圧倒的な数の前では意味を成さない。
おまけに、場所が狭い地下通路と来ては分が悪い。私に出来ることといえば、前から向かってくる魔族の気配を察知して、その道を避けつつひたすら逃げ回ることだけだ。
この狭い地下通路で挟み撃ちに遭えば、それこそ袋の鼠である。
もし、ここで捕まれば、私は連れ戻されるだけだろうけど、人間のアズサはその時点でジ・エンドに決まってる。
「ひえええええ！」
本人もその自覚は十分あるみたいだ。重たそうな甲冑を身に着けながらも、アズサは私の前をすごい速さで疾駆している。
通路を進む（正確には戻ってるんだけど）につれて、鬼ごっこの鬼の数は増していく。もう、人質の体を装う余裕もなく、私達はひたすら逃げるだけである。
うう、素足なだけに足が痛い……。
なんで魔族のお姫様の私がこんな目に、なんて、文句は言える立場じゃーないことは知ってるけども……ムカツク事はムカツクの！
文句ある！？
「アズサ！　そこ左曲がって！　左！」
突き当たりの通路を左へ曲がると、地上への昇り階段が顔を出す。
私達は一目散に階段を駆け上って、回廊まで無事たどり着いた。
「ほら、アズサ。あんたもやるの！」
「ええ……でも、いいんですか？」
「人間が魔族に遠慮してどーするのっ。情けは人のためならずってゆーでしょ」
「それ、意味違いますし、相手人じゃないし……」

「いーから、や・る・の！」
渋るアズサを説き伏せて、私達は回廊に飾られた石像やら、甲冑やら、武器やらを手当たり次第に地下の出入り口から下へ投げ込んだ。地下から魔族達の悲鳴が響き渡る。
うん。いいストレス解消になるや、こりゃ。
仕上げに鉄製のガーゴイル像を二人がかりで地下階段へ転がす。魔族共の悲鳴を背に、私達は回廊を後にした。

いい加減うんざりする長い回廊も、終わりに差し掛かっていた。私たちの前に、無駄に大きな扉が姿を現す。追っ手の気配は、さすがにまだない。
自由を目の前にして、私の足は加速する。気がつけば、前を走っていたアズサを抜き去り、私は無駄に大きなドアを押し開けて、外に飛び出た――瞬間。
予想とは違った景色が、私の視界に飛び込んだ。
「ガアアアアア！」
待ち構えていた鬼面人（オーガ）が、手にした巨大な棍棒をまさに私の頭上目がけて、振り下ろしていたのだ。
もし、探索（ディテクション）を用心深く使っていたなら、そんな不意打ちなど食らうこともなかっただろう。でも、地下通路で魔族共を撒いたことで、私は完全に油断して、術を解いていたのだ。
っていうか、仕方ないじゃないの！　用心なんてしてちゃ、自由に手は届きっこないでしょ！？
頭の中でいくら強がってみても、私に出来たのは、とっさに目を

つぶることぐらいだった。想像もしたくない「衝撃」を想像して、決めたくもない覚悟を決める。
――鈍い音が私の鼓膜を叩いた。
「――って、あれ？」
いくら待ってみても、衝撃は一向に私に降りかからない。恐る恐るまぶたを上げると、白銀色の甲冑が、私の前にあった。
アズサだ。
私はきょとんとして、ぱちくりと目をしばたかせた。
岩の塊のような棍棒の打突部分が私のすぐ横の地面に突き刺さっていた。持ち手部分から先を失った棍棒を、鬼面人（オーガ）は不思議そうに眺めている。
刀剣（ブロードソード）を抜き放ったアズサは、私をかばう様に鬼面人（オーガ）と対峙している。間一髪のところで、アズサが助けてくれたことを、私はようやく理解した。
体長二メートルは優に超える怪物の一撃を防いだ上に、岩のような棍棒を真っ二つにするなんて――。
もしかして、アズサって実は強かったわけ？
今までのアズサを見ていると、とても信じられないが、今起こっているのは紛れもない現実だった。
「ア、アズサ……」
「怪我、ありませんか？」
振り返らずに、アズサは鬼面人（オーガ）と向かい合ったままで、声を出す。
なんだろう。なんかもう、別人のようにアズサの背中が凛々しく見える。
「あ、ありがと。助かったわ、アズサ」
「キャロットさ――」
「んじゃ、その調子で頑張って。後、よろしく」
すかさず、私はその場から駆け出した。
「えええええ！？」
あ。元のアズサに戻った――なんて思いつつも、私はアズサと鬼（オーガ）

面人をその場に残して、離脱する。
棍棒を真っ二つにされて、鬼面人（オーガ）の標的は私からアズサに切り替わっていた。それを見越しての、戦略的撤退である。まあ、トンズラとも言う。
魔族の定義は「人間以上の知能を持つ人間以外の生物」ではあるけど、その中には、知能を持たない生物も存在する。そいつらは「魔族」ではなく「魔物」と区別され、魔族とは一線を画した下等生物である。
鬼面人（オーガ）は、まさに魔物の代表格みたいなものだ。知能が低いだけに「容赦」も「遠慮」もおまけに「みさかい」もない。
門番としてはうってつけなのだろうけど、敵、味方の区別なく襲ってくるような奴と、まともに戦（や）りあうのは得策じゃーない。
「置いてかないでくださいよぉー！」
アズサの悲鳴にも似た声に、私は走りながら返事を返す。
「一分だけ時間稼いどいて！　ちゃんと援護するから！」
「そ、そんな――」
アズサの声が鬼面人（オーガ）の怒鳴り声にかき消される。
……あれ？
なんか、鬼面人（オーガ）の怒鳴り声が複数に聞こえた気がして、私は走りながら、今一度背後を振り返った。
……嫌な予感的中。
一体だけでも厄介なのが、いち、にい、さん、よん、ごお、ろく、しち……全部で八体に数が増えている。怒鳴り声に引き寄せられて、別の門番役達が駆けつけてきたのだ。魔物のクセに、随分仕事熱心なことである。なんて、冗談を言ってる場合ではない。
さすがに、八体もの鬼面人（オーガ）を一人で相手には出来ないのだろう。アズサは対峙する鬼面人（オーガ）の攻撃をやり過ごすと、一目散に逃げを決め込んだ。
時間稼げって言ったのに……。
「ゴアアアアアアアオオオ！」

八体の鬼面人（オーガ）が雄たけびを上げながら、アズサを追い立てる。
ま、まあ……文句は言わないでおこう。
――さて。
おおむね、城から離れた場所で私は足を止めた。
離れた場所から改めて見ると、そこそこ立派なお城ではあった。
まあ、外装は悪趣味としか言いようがないけど。
「さて……と」
私は上がった息を整えるために、深呼吸をした。
封魔の結界から抜け出した途端、ある変化が私の中ですぐに表れていた。今までは感じることのなかった、自分の魔力。長年、封じられ続けていたものが私の中で脈動するのを感じる。
初めてのはずなのに、懐かしいような感覚。鼓動を刻む心臓のように、胸に手を置けば感じることの出来る静かな実感、とでも言えばいーのか。とにかく、不思議な感覚ではある。
息を整えて、静まっていく鼓動に反比例するように、魔力が膨れ上がっていく。私は、胸に両手を置いて、そっと目をつぶる。
意識を集中して、渦巻く魔力を制御する。
――いける。
まだ試したことのない呪文を、私は心の中で反芻した。言の葉に魔力を乗せて、詠唱を始める。
『古代の闇を統べる王。悠久の時を経て、汝、ここに降り立つことを我、ここに約束せん。混沌にたゆたう偉大な魂に応え、我、ここに滅びを捧ぐ。汝、我が呼びかけに応え、その全ての力持て、破滅の道を共に歩まんことを――』
まぶたを上げて、私は魔力を一気に解放した。
『――竜神召喚（ドラグヴェント）！』
両手を天空に掲げる。上手くいけば、これでドドーンと「竜神・ヴェルザー」が私の元に降臨するはずである。そう、ドドーンとね。
「……」
ド、ドドーンと――。

「……」
降臨……。
「……」
するはず、なんだけど……？
「な、なんででせう……？」
「グゴアアアアアア！」
鬼面人達（オーガ）が、すぐそこまで迫ってきていた。

6．旅立ち！

世界に現存する魔術は、その性質から二種類に分類される。すなわち、光魔術と闇魔術である。双方の性質の違いについては、話し出せば世界の歴史を紐解くことになり、ひじょーに面倒臭くなるので以下省略。

かいつまんで言えば、魔術はすべて「召喚」するものだという概念が最も有力とされている説である。その辺も話し出せば長くなるので以下省略。

とにかく、私が言いたいのは私が使った呪文――「竜神召喚（ドラグヴェント）」は、闇魔術の中でも最高位のひじょーに難しい魔術であるということである。

闇魔術はその性質から「具現系」と「抽象系」の二種類に分類される。

噛み砕いて言うと、物騒な生き物を召喚するか、しないかの違いである。

当然、物騒な生き物を召喚する方が難しいわけで、私が試みたのもこっちの方だ。それも何千年も前に存在したとされる、竜族の王様「竜神・ヴェルザー」を召喚しようというのだ。その難易度は、言うまでもない。あえて言うなら、間違いなく人間には扱えないし、魔族の中にも使い手はおらず、この呪文が記された古書は魔族のお城の書物庫で埃を被っていたほどである。

――……だから、なにが言いたいんだって？

できなくて当たり前ってこと！　なんか、文句ある！？

とにかく、今一度体勢を整えるため、私はその場から逃げ出そうとした。その時である。

唐突に、天から降ってきた光の柱が、鬼面人（オーガ）八体を貫いた。

「グギャアアアアアア！」

耳を覆いたくなる悲鳴と共に、鬼面人（オーガ）達が金色の柱の中で消失し

た。破壊とか、そういうレベルの話ではない。肉片一つ残らない、完全な消滅である。
「な、なんですかあれっ！」
間一髪、光の柱から逃れたアズサが取り乱しながら私にしがみつく。
「今のキャロットさんの仕業ですか！　私まで巻き添え食うとこだったじゃないですか！　なんなんですか、あれぇ！」
いやあ、それはこっちが聞きたいんだけども……。
とにかく、呪文失敗なんて格好悪くて言えないので、私は不敵に笑って見せた。
「落ち着いて、アズサ。今の光は私の超魔力が呼び出したものよ」
「じゃ、じゃあ、もちろん、私が巻き添えにならないように計算してたわけですよね？」
「もちろんじゃないの」
「じゃ、じゃあ、もちろん……」
そう言って、アズサは震える手で空を指差した。
「あ、あれもキャロットさん――ですよね？」
「あれ？」
アズサの指差す方へ顔を上げてみる。と、何かがまたもや空の彼方からこちらに向かって降ってきていた。さっきと同じ金色の光。それも、巨大な球体がものすごいスピードで私たちの頭上へ振ってきている。
それは、あっという間に、私たちの元へ降り注いだ。
「あ――」
空中で軌道修正した光の球体は私たちの頭上で弧を描き再び飛翔する。目にも留まらぬスピードで宙空を散々飛び回った後に、その光の球体はゆっくりと私たちの前で動きを止めた。
も、もしかして、これって――？
「ヴ、ヴェルザー……？」
私の言葉を合図にしたように、音もなく光の球体が弾けた。

光の破片が粉々に砕け、空気中に溶けるように消えていく。そして、そこに姿を現したのは――巨大なドラゴンだった。
竜神・ヴェルザー――なんて見たことないけど、間違いなく目の前に立つドラゴンがそうであることを、私は確信した。
私の魔力がそう言ってるのだから（といっても、こいつがそうだ！　って、言ってるわけではなく、共鳴してるという意味だ）間違いない。
遥か古、まだ魔と神と人が共存していた時代、すべての竜族の頂点に君臨し、神族を束ねていた、まさしく神の代名詞的存在。その力を持って、人と魔にケンカを吹っかけ、返り討ちにあったマヌケ……もとい、神の暴爆（ハルマゲドン）を引き起こし、世界を破滅に導いた、最強最悪の竜神である。
……しかしまあ、当たるも八卦、当たらぬも八卦のつもりだったのになぁ。
まあ、呼び出しといて今更後に引くわけにもいかない。とにかくここは――。
「ちょっと、あんた。発動から出てくるまでのタイムラグが長過ぎよ。ちょっと、恥かいちゃったじゃないのよ」
とにかく、文句を一発ぶち込んでこの重たい空気をいい感じにほぐしてやろうとしたんだけど……竜神は、無反応で私たちを見下ろしている。
うう、空気重い……。
「ち、ちょっと、キャロットさん。このドラゴンは一体なんなんですかぁ……！」
アズサがアセアセと私に耳打ちする。
「竜神・ヴェルザーよ」なんて言えば、ショック死でもしそうなうろたえ振りである。
「竜神ヴェルザーよ。私の魔術で呼び出したの」
そうアズサに耳打ちしてやると、期待通りアズサは驚きの余り口をあんぐりと開けたまま固まった。

……さて、と。
「我が名はキャロット＝ルシフェル。汝の魂をここに召喚した者である。我が魔力の呼びかけに応えし、古の神よ――って、堅苦しい挨拶とか苦手だから単刀直入にお伺いするわ」
そう言って、私は巨大なドラゴンを見上げた。
「あんた、竜神・ヴェルザーね？」
「……いかにも、我が名はヴェルザー。竜神の名を冠する者である」
竜神の言葉が私に理解できるのは、今のヴェルザーが私の魔力により制御されているからに他ならない。しかし、気を抜けばたちまち魔力を根こそぎ持っていかれ、下手をすれば生命力まで吸い取られそうな勢いである。
さすがに、竜神だけあって、そこら辺にいる魔族のドラゴン共とは「力」も「魔力」も比較にならない。気を抜けば、間違いなく私はこいつに「喰われる」だろう。
「キャロット＝ルシフェル……まさか、汝はルシフェルの意志を宿す者か」
「……え？」
「なるほど……その真紅の瞳はまさしく真魔眼（ブラッド・アイ）か。皮肉なものだ。再びこのような形でその瞳を持つ者と出会おうとは……」
「よく分かんないんだけど、ヨタ話ならよそでやってもらえる？」
強気でペースを握らなければ、たちまち「喰われる」ので、私は虚勢を張ってみせる。しかし、ヴェルザーはそんな私の態度を意に介さず、巨大な体を打ち震わせながら盛大な笑い声を上げた。
それだけのことで大気が震えて、私は思わず尻餅をついた。ちなみに、アズサは未だに立ったまま失神している（器用だこと）。
「面白い。汝は何も知らぬというわけか」
いや、ちっとも面白いことなんてないんですけど？
「偶然か必然か……どちらにしろ、まだ何も知らぬうちなら引き返すこともできよう。汝が求めるものはなんだ」
「……そんなの決まってんでしょ。自由よ」

「その自由が逆に汝を縛り付けることになるとしてもか」
「……？」
「答えよ。さすれば、我は汝の望むものを与えよう」
なんか言ってることチンプンカンプンだけど、まあいいや。答えなんて、とっくの昔に出てるんだから！
「私は私のやりたいようにやる！　誰にも文句は言わせない！」
威勢良く叫んで、私は立ち上がる。
「あくまで、自由を欲するか」
「とーぜん！」
「ならば、竜神ヴェルザーの名において、汝に破滅の道を明け渡す。――命ぜよ」
「姫サマあああー！」
っと、モタモタしている間に、お城から魔族共がうじゃうじゃと出てきていた。私は、コホンと一つ咳払いすると、ビシっと私の籠（かご）を指差した。
「我、汝に命ずる！　我を縛るものを打ち滅ぼすべし！」
「――承知した」
巨大な翼を瞬かせ、黄金のドラゴンが飛翔する。天高く舞い上がるその様はまるで光の矢のようだ。
瞬く間に大空の彼方に姿を消したヴェルザーの姿を探す。
が、その前に閃光が煌いた。
「うわあああああああ！」
さっき、鬼面人（オーガ）八体を消し去った金色の光の柱が、お城に降り注いでいた。まさに、一瞬のうちに、私の籠は跡形もなく消え去った。どーにかこーにか、魔族共は巻き添えを免れたようで。
「姫サマあああ！　なんてことをををー！」
残党がまぁだしつこく私を捕まえようとこちらに向かってくる。
が、またもや光の柱が振ってきて、私と魔族共の間を遮った。
ヴェルザーが流れ星のように降下してきて、私の前に降り立つ。
その姿を見て、魔族共は揃いも揃って言葉を失っている。

「我が名は竜神・ヴェルザー。悠久の時を経て、彼の者に呼び出されし者なり。彼の者は自由を求めている。それを妨げる者には、等しく消滅を与える」
ヴェルザーの最高の脅し文句に、抗える者は誰一人としていなかった。まさに蛇に睨まれた蛙状態である。
「十五年間どうもお世話様でした。帰る家もなくなったところで、私は今日旅立ちます」
恭しくお辞儀をして、私はにっこりと魔族共に微笑んだ。
「もう私を連れ戻そうなんて馬鹿なことは考えないでね？（副音声・これ以上付きまとってきたら容赦なくぶっ殺す）」
冷やせ汗をだらだらと流す魔族共に見送られ、私はアズサと共にヴェルザーの背に乗り、その場を後にした。

7．いざ、次元の狭間（カオティック・ゲート）へ！

お城を抜け出したのはいいけど、まだ、私たちにはするべきことがあった。というか、ここからが本番とも言える。

なんせ、今度は魔界から抜け出さなければならないのだ。

「やっぱ、人界に入るには次元の狭間を突っ切るしかないけど……できそう？」

「それは汝の魔力次第だ」

「……そりゃ、そーだけどさ」

「一度次元の狭間に入れば後戻りはできぬ。途中で魔力が尽きれば、汝らは一生次元の狭間に閉じ込められるであろう」

「わーかってるわよ、もう！　だからって、今更後には引けないのよ！」

私はそう声を上げて、ぴしゃりとヴェルザーの背中を叩いた。

まったく、もう。この竜神は誰のおかげで私がこんな危ない橋を渡らなければならないと思ってるんだか……！

そもそも、次元の狭間は、古の時代に引き起こされた神の暴爆（ハルマゲドン）により創られた代物だとされている。神と魔と人が共存していた時代、その世界は神の暴爆（ハルマゲドン）により破滅した。しかし、その破滅の影響はその世界のみに留まらず、あらゆる世界にも影響を及ぼし、異世界の間に歪を生み出してしまったのだ。

最も、この話はここと違う世界がいくつも存在するという詐欺紛いな説を信じなければ、成立しないから、話半分に聞くよーに。

とにかく、神の暴爆（ハルマゲドン）の膨大なエネルギーは一つの世界のみならず、いくつもの世界に歪を与えた。分かりやすくいうなら、その歪が異世界間をつなげる「穴」となり、それを俗に次元の狭間と呼ぶようになったのだ。

もっとも、今話したのは数多くある説のうちの一つに過ぎない。

人界と魔界は次元の狭間により繋がれた、全く別の世界であると

か、元々一つの世界だったものが、神の暴爆（ハルマゲドン）の影響を受け、次元の狭間により別々に切り離されてしまったとか、諸説様々である。
とにかく、神の暴爆（ハルマゲドン）を引き起こし、次元の狭間を創り出した張本人とされているのが、竜神ヴェルザーなのである。
まあ、それも大昔の話だし、史実がどうだったかなんて疑わしいけど、このドラゴンが、それぐらいやりかねない力を持っているというのは事実だ。
今更だけど、とんでもないのを召喚しちゃったなあ……。
しかし、次元の狭間を抜けるにはどうしても、ヴェルザーの力が必要なのだ。
「ねえ。あんた、カオティック・ゲートの場所知ってるの？」
私の言葉に、ヴェルザーの低い声が返ってくる。
「カオティック・ゲート？」
「次元の狭間がある場所のことよ」
「……我に見通せぬものなどない」
「そりゃ、失敬」
魔界の最北端にあるカオティック・ゲート。人界と魔界を繋ぐ入り口。通常、そんな危なっかしい場所は魔族であっても滅多に近付くことなんてないけど、魔族も自界の入り口を放置しておくほど馬鹿じゃーない。
つまり、歓迎されない者には、それなりの豪華プレゼントがご用意されてるわけである。
「……何かがこちらに近付いてくる」
なんて思ってる傍から、ヴェルザーが警告を発する。随分、鼻の利くドラゴンだこと。
「おでましね」
一難去ってまた一難。魔界の景色をゆっくりと拝む暇もない。雲を切って大空を突き進む私たちの対面から迫ってくるものは、うぞうぞと不気味に蠢く暗闇だった。
「な、なにあれ……」

よく目を凝らしてみると、それは――。
「へ、蛇いぃ……！」
暗闇と見紛うそれは、空飛ぶ、もとい空うねる巨大な大蛇の群れだった。
うえええぇ、気色悪ぅ……。
いくら、魔界育ちで化け物系統に免疫があっても、気色悪いものは気色悪いのだ。鬼とかガイコツとかなら平気だけど、虫とか爬虫類系は生理的に絶対嫌っ！
「ちょ、ちょ……！　なんとかして、早く！　あの気持ち悪いの早く消滅させてっ！　早くっ！」
「しかし、ここで無駄な魔力を使うと――」
「いーから、早く！　少しでもアレが私に触れでもしたら、あんたから先に消滅させるわよっ！」
「――承知した」
私の言葉を受けて、ヴェルザーはスピードを上げてまっすぐ大蛇の大群へ突っ込んだ。って、ちょっとぉ！
大蛇の大群に飲まれる凄惨なシーンを想像して、私の全身に鳥肌が立つ。
大蛇の群れと衝突する！
私は思いっきりまぶたを閉じて、腕で顔を隠した。
「――？」
恐る恐るまぶたを上げる。すると、私の視界に光の壁が飛び込んできた。金色に光るそれは、ヴェルザーの周りを覆い、触れたものすべてを消滅させた。
登場シーンの時に、ヴェルザーを覆っていた光の球体と同じものだ。まるで、光の防壁の内側と外側は切り離されてでもいるような錯覚を覚える。事実、さっきまで感じていた風の抵抗はなくなっていたので、錯覚とも言い切れない。一種の結界魔術のようなものだろうけど、外側からの干渉を防ぐと同時に、触れたものすべてを消滅させるなんて馬鹿げた結界は聞いたこともない。

「……ねえねえ。なんていう反則技よ、これ？」
「時間がない。このまま一気に次元の狭間に入るぞ」
暗闇を綺麗に浄化させたヴェルザーが、私の軽口を無視して、言葉を発する。私の返事を待たずに、ヴェルザーは加速を開始した。光の外の景色が超高速で流れていく。
「そこまで――」
「カオティック・ゲート番――」
「誇りにかけて――」
「これ以上先――」
「いかせな――」
次々に行く手を遮る魔族達は、最後まで台詞を全うすることなく消えていった。
「身も蓋もないなあ……」
まあ、端役に同情するほどこっちも余裕があるわけじゃーないけども。
「――いくぞ」
書物等から得た知識はあるものの、実物を見るのはこれが初めてのことだった。
空間に斜めに伸びる巨大な裂け目。体長十メートルは優に超えるヴェルザーでさえ豆粒に思えるほどの巨大な歪は、果てしなく暗く、不気味に蠢いている様に見える。
そこにあるだけで生き物を飲み込んでしまうような威圧感は、ヴェルザーの結界を持ってしても拭うことはできなかった。
「あれが……次元の狭間？」
「死にたくなければ魔力を開放しろ」
「あんたねえ。それが散々人の魔力食っといていう台詞？」
「できなければ死ぬだけだ」
……血も涙もないドラゴンである。
しかし、正直ここに来るまでにもう相当の魔力を消費してしまっている。いくら、私が稀に見る美少女天才魔術師（自称）だと言っ

ても、魔力に覚醒したてでペース配分なんて緻密（めんみつ）なコントロールを求められても無理な話だ。

とにかく、魔力が底を突きかけている今の私にできることは――。

「こんなとこで死んでらんないのよっ！」

――根性でこの場を乗り切ることだけである。

次元の狭間に啖呵を切って、私達は巨大な歪の中に突入した。

8．絶体絶命！

景色が一変した。
光の結界の外側にあるものは、闇、闇、闇……右も左も前も後ろも、何もない真っ暗闇だった。
「これが……」
次元の狭間。大昔に創り出された世界の歪。しかし、今の私にはいわゆるこれが、自由への門出の第一歩だ。
うう、先が思いやられるわ……。
「次元の狭間は強力な斥力の塊みたいなものだ」
「斥力？」
「斥力とは二物体間で互いに遠ざけようとする力。反発力、と言ってもいい。次元の狭間とは世界の歪。歪とは人間に例えるなら傷と同じようなもの。人間に自然治癒能力が備わっているように、世界にもそれは備わっている。この場合、世界に備わったその自然治癒力が、斥力の発生原因になっているのだろう」
……えーと？
「自然治癒能力とは、元に戻そうとする力だ。異世界間で同じ傷を負ったために、その傷を治そうとする二つの全く別の力がそこに集中し、反発しあっている。結果的に、それが次元の狭間の役割……異世界間をつなげる原因になっているのだろう」
「へえーなっるほどー――って、呑気に解説してる場合じゃないでしょっ！」
つまり、まさに今、その異世界間の斥力の中に私たちは晒されてるのである。
「なんか、さっきから全然前に進んでないじゃない！　しっかりしなさいよ！　あんたそれでも竜神なの！」
「我は汝に召喚された。発揮できる力は汝の魔力に左右――」
「んな当たり前のこと分かってるわよっ！」

「ならば魔力を開放――」
「できたらとっくにやってるわよっ！」
ああっ、もう。ムカツク。こいつ、ムカツク……！
次元の狭間に突入して一分も経たず、私たちはその腹の中で身動きがとれずにいた。不気味な闇は、世界間の斥力そのものらしく、ヴェルザーの鉄壁の結界もところどころに亀裂が入り、分かりやすく凹(へこ)み始めている。このまま、こんなとこで立ち往生し続けていれば、間違いなくお陀仏だ。
「ちょっと……！　何とかなんないわけ……！」
得体の知れない疲労感が、さっきからドッと私の体にのしかかっていた。分かり易く例えるなら、限界まで全力疾走した挙句、酸欠状態でスクワット百回こなしたみたいな、意味不明で、今まで経験したことのない疲労だ。
呼吸が上手くできない。胸が苦しい。
私はたまらず、胸を押さえながらヴェルザーの背の上でうずくまった。
魔力が尽きるのが、これだけ苦痛を伴うなんて聞いてない。話が違う！
かといって、今ヴェルザーに注いでいる魔力を途切らせてしまえば、その瞬間、ヴェルザーは消えてしまい、ジ・エンドだ。
……もしかして、絶対絶命のピンチってやつ？
ヴェルザーの光の結界が更に凹みを増して、ジジジジジ、と悲鳴を上げる。
冗談じゃない。こんな光も差さない真っ暗闇で、ドラゴンやエセ勇者と心中なんて真っ平ごめんよっ！
「な、何か方法ないの……！」
息も絶え絶えに、私は声を絞り出した。朦朧(もうろう)とする視界の中で、光の結界がぼやけて見える。
「一つだけ、方法はあるにはある」
「え……」

「汝が指にはめているその指輪だ。その指輪にはめ込まれている輝石から、強力な封魔の波長を感じる。それがリミッターとなり、汝の魔力を抑制しているのだ」
「……あのねえ。そーいうことは早く言いなさいよ……！」
「できれば、そのリミッターは外すな――と、忠告だけはしておく」
「……そりゃ、どーも」
私はヴェルザーの背の上で仰向けに転がって、左手を上にかざした。5クラリティに精製した円形の輝石。私の人差し指で、澄んだ青の輝きを放つこのブルーレイの指輪は私の大のお気に入りだ。これが魔力を抑制するなんて初耳だけど、今は四の五の言ってる暇もない。
私は、躊躇せずに指輪を外した。
「外した――けど……？」
何も変化は起こらなかった。
「なんか……変化が起こるんじゃないの……？」
私の言葉に、ヴェルザーはだんまりを決め込んでいる。
やばい。もう、意識を保ってらんない……。
「こんなとこで……――」
意思とは裏腹に、私の意識は途切れ、暗闇に飲み込まれた。

8．絶体絶命！（後書き）

ネット小説ランキングに登録しました。投票していただければ励みになります。

ちなみに、クラリティは宝石の質量を表す単位です。１クラリティは２００ミリグラムです。

9．よろしくね！

ぼやけた視界に、低い天井が映った。
ぬるま湯にどっぷりと浸かったように、ゆらゆらと意識が揺れる。
見慣れない天井についたシミを見つめながら、私は額に手を当てた。
頭が重い。いや、頭だけじゃなくて、全身くまなくとてつもなくだるい。一体なにがどうなっているのだろう。
重たい思考回路を持て余しながら、私はベッドから体を起こした。
――ここ、どこだろ……？
「っつ……」
ズキンと頭が痛んで、私は頭を抱えた。
痛みが記憶を呼び覚ますように、なにがあったのかを思い出す。
そうだ。確か、あの時魔力が尽きて、意識が――。
「私……生きてる――？」
言葉に実感が伴わずに、私は両肩を抱いてうずくまった。
「キャロットさん！　気がついたんですか！」
部屋のドアが開いて、アズサが私の元に駆け寄ってきた。

アズサの話によると、私は三日間眠り続けていたらしい。魔力の使いすぎによる反動だと、ヴェルザーは言ってたらしいけど、生憎そこんとこの記憶が抜けてるだけに、実感の伴わない話だった。
「じゃあ、私が自力で次元の狭間（カオティックゲート）を突破したってこと？」
「はい。憶えてないんですか？」

「憶えてないわよ。ってか、私途中で魔力尽きて気を失ってたんだから」
「はあ。私も目を覚ましたの次元の狭間（カオティックゲート）を抜けてからでしたから、よく分からないんですけど――気を失ってる間に危ない橋を渡らされてたことは後になって知りました」
そう言って、アズサはじと目で私を睨んだ。
「あはは……ま、まあ、過ぎたことは気にしない、気にしない。それに、あんただって魔界に来た時、次元の狭間（カオティックゲート）、通ってきたんでしょ？」
私の言葉に、アズサはがくっと肩を落とした。
「そんなわけないじゃないですか」
「え？」
「次元の狭間（カオティックゲート）を正面突破なんて命がいくつあっても足りませんよ。次元の狭間（カオティックゲート）の影響で、人界と魔界はいろんな場所に小さな歪ができてて、そこから行き来できるんですから」
「そ、そうなの？」
「知らなかったんですか……」
「ま、まあ、生きてたんだから、いーじゃん」
魔族共の話だと、人界と魔界は次元の狭間（カオティックゲート）でしか行き来できないって事だったけど……あいつら、私が変な気を起こさないように、騙してたな。
「あんただって、あのままあそこにほっとかれたら、今頃こうやって文句も言えなかったんだから。そうでしょ？」
苦し紛れの私の言葉に、アズサは反論できず黙り込んだ。まあ、事実だからね。
さて。アズサの機嫌も直ったところで、もうちょっと詳しい話を聞くとしますか。
「ねえ、アズサ。あんたの話だと、あんたが目を覚ましたのって、次元の狭間（カオティックゲート）を抜けた後なのよね」
「はい。そうですけど」

つまり、私が気を失った後のことはアズサも知らないってことか。知ってるのは――。
「ヴェルザーだけってことね……」
私の独り言に、アズサは不思議そうに首をかしげてから、思い出したように声を出した。
「そういえば、そのヴェルザーさんが言ってたんですけど」
「なに？」
「我はもう召喚するな、って」
「は？　なんで？」
「世界の破滅につながる、って言ってましたけど……」
「世界の破滅ぅ」
アズサの言葉に、私は思わず顔をしかめた。
「何の冗談よ、それ」
「でも、竜神ヴェルザーって、大昔に世界を滅ぼしたことがあるんですよね」
「……まあ、確かに冗談言うタイプじゃなかったけど」
しかし、世界の破滅って話が飛躍しすぎでしょ。たかが、十五歳の女の子の家出に、世界の破滅って。まあ、家出の足に竜神使ったのはちょっとまずかったかもしれないけど。
ずいぶん神妙な顔で私を見つめるアズサに、私は肩をすくめた。
「ま、今を生きるのに、何千年も前の神の言葉なんていちいち気にしてらんないわ」
「キャロットさん……」
「安心して。滅多なことがなきゃ、竜神召喚（ドラグヴェント）はもう使う気ないから。使うと死ぬほど疲れるしね、あれ」
「なんか、この世界の運命がキャロットさんに握られてるような気がするのは気のせいなんでしょうか……？」
「――あんた。今、ずっと魔界の穴倉に居てくれればよかったのに、とか思ってるでしょ」
そう言って睨んでやると、アズサはうろたえながら、首を横に振

った。
「そ、そんなことない……ですよ」
じゃあ、今の間はなにかしら？
「ま、いいけど」
そう言って、私は息をついた。
それにしても、腑に落ちない……ってか、気に入らない。
十五年間、封魔の結界の中で魔力を封じ込められ続けて、更に用意周到なことに、アクセサリーにまで魔力抑制器（アンチマテリアル）を仕込まれてたし。呼び出した竜神は最初から最後まで思わせぶりなことばっか言いながら、結局何の答えも残さずに消えちゃうし。
「あの、キャロットさん。これから、どうするんですか？」
黙って考え込んでいる私に、アズサは椅子に座り直しながら言った。
「これから、行く当てとかあるんですか？」
「んーん。ないよ。勇者と一緒に魔界を抜け出すことだけ考えてたしね」
私の言葉に、アズサは「なんて無鉄砲な」と言いたげに苦笑を漏らした。まあ、言葉に出さなかったのは、私の性分を十分に理解してのことだろう。
「で、考えたんだけどさ。あんたがあくまで自分のこと勇者だって言い張るんなら、とりあえず、あんたの素性確かめるのが一番手っ取り早いかなって」
私の言葉に、アズサの笑顔が固まった。
「え、えーと……キャロットさん？」
「まあ、当面の行く当てもないし、あんたに同行することにするわ」
「するわ、って私の都合は――」
「よろしくね（副音声・断ったらどうなるか分かってるわよね？）？」
「よ、よろしくお願いします……」
私の笑顔に、アズサは観念して快く私の申し出に同意した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4484e/

プリンセスと呼ばないでっ

2010年10月8日22時59分発行